

『はだしのゲン』の出版社ということに誇りを持ち、子どもたちに社会課題を分かりやすく伝える児童書を刊行する汐文社。2020年に発行された同社のある絵本が、子どもたちへのSDGs浸透に大きく関わったことが明かされる、編集者の門脇大さんの証言――。

汐文社 副編集長 門脇大



かどわき・だい／1975年、東京都生まれ。編集者、制作会社、ほるぷ出版を経て汐文社、現副編集長。担当作品に『ヒロシマをのこす 平和記念資料館をつくった人・長岡俊吾』(佐藤真澄著、厚生労働省児童福祉文化財児童福祉文化賞大賞)、『クニマスは生きていた!』(池田まき子著、第64回青少年読書感想文全国コンクール課題図書)、『わたしがわかる みらいもわかる SDGsはじめのいっほ』(原琴乃作、第12回ようちえん絵本大賞)、『えほん連野物語 おいぬさま』(京橋夏彦文、中野真典絵)、『えほん連野物語 おしらせさま』(京橋夏彦文、伊野孝行絵)ほか。国内最大規模の案指会・四谷デッサン会主宰、一般社団法人新領域美術協会兼任理事など、美術団体の運営にも携わる。

「わたしがわかる みらいもわかる SDGs はじめのいっほ」以下、『SDGs はじめのいっほ』は、子どもたちが行動に移せる具体的な例を提案し、SDGs を実践しながら基本理念を理解できるように工夫されています。著者の原琴乃さんは現役の外務省職員です。政府のSDGs推進に関する企画・立案を担当した第一人者がなぜ絵本だったのでしょうか?

原さんは9歳の時に絵本作家としてデビューしています。絵本を自分で作っていたこともあって、絵本の役割というものをよく存じたので、このような形式になったんだと思います。『SDGs』の普及活動においては、人気のキャラクターを使った動画が話題になったこともありましたが、それと経済界を中心に大人の世界では着実に認知が広がっていく一方で、子どもたちにもメッセージを届けることに苦戦し

ている状況でした。SDGs に関する児童書は、本書の企画当時も存在していたのですが、いずれも17目標を紹介することに重きを置くものでした。低年齢の子など、もっと広く子どもたちに理解してもらうためには、SDGs の根本にある考え方を感覚的に理解してもらえようかなものを作ることが必要なのではと原さんと対話を重ね、そのための表現方法として絵本という形で伝えることを最終的に決めました。

原さんは外務省でSDG 推進の旗振り役として日本にSDGs を広げていった第一人者で、監修者の山田基晴さんは国連の日本政府代表部で日本に情報をもたらす外交官でした。SDG 黎明期に活躍した2人を作ったのが『SDGs はじめのいっほ』なのです。

原さんなら、伝手はいろいろあったでしょうし、大手の出版社から出すという方法もあったと思いますが、私が

児童書で扱ってきたテーマと重なるSDGs 人づてに口づてに、子どもたちにも届けられるメッセージ

原さんにお話したのは、「当社なら学校図書館を中心に公共施設へ確実に広げることができるといふことでした。お金を使い、大きく宣伝する(ことで)瞬間的にパッと売って広めるということではなく、確実にできますが、絵本でそういうやり方をしようとすると思外とすそ野まで拡大していかないものです。保護者や学校の先生がまず受け入れてくれな

いと広がっていきません。」
「私たちが口頭から目指しているのは、口づてに広がっていきなかな形です。絵本を丁寧に広げていきたいとお考えでしたら、そのお手伝いならでき

ます」と言いました。

本書は「ようちえん絵本大賞」を受賞したこともあり、幼稚園や保育園にも広がっていききました。絵本を作った時点では、さすがにSDGs は小さな子どもには難しいだろう。せめて小学校低学年ぐらいに刺さるといいなと思っていました。原さんにも予想以上に広い層から反響があったと思っていました。これはいいではないでしょうか。

理念浸透 読み聞かせ橋渡し

「予想以上の広がり」のことです。後押ししたのは何だったのですか? 読み聞かせをしてきている人の力が大きかったと思います。子どもたちが『SDGs』は大切! ということだけでも覚えてくれたら、後世につながるかもしれません。現在、全国でSDGs を未来のキーワードにしているという意識が高まりつつありますが、本書もそのきっかけをつくったという自信を捧っています。

――絵本でSDGs 推進協会代表理事の朝田仁美さんに伺った、『SDGs はじめのいっほ』はSDGs 絵本の代名詞だとおっしゃっていました。

「この本はとにかく、口づてに、人づてに広めていかねばならない、いさゝか願

た結果、『SDGs』に特化する、絵本の普及活動を行う朝田さんに出会い、本書を紹介しました。朝田さんは「この絵本は扱いやすい」と喜んでくださいました。そういう意味では、私の狙いと朝田さんの求めるところが合致していました。朝田さんのような人がいないと、このような子どもが好むというより、大人が子どもに読ませたいと思うような絵本はなかなか広がっていかないもの

どもたちにも届けるということも元々私たちが挑み続けてきたテーマでもあるのです。『SDGs』で訴える大半の事柄は子どもの本の世界でこれまで培ってきたことの「言葉換え」ではないかと思えます。

先ほどお話に出た「人づてに」で伝わっていくということもそうですね。私たちがこれまで築いてきた「本を作る人」学校の先生「子どもたち」というルートでSDGs もたどって広がっていると思えます。

――SDGs が日本で浸透していく過程に一冊の絵本があったことを知り少し興奮しています。『SDGs はじめのいっほ』の続編に「当たる」わたしもできる! 世界とつながるSDGs アクションが22年3月に出版された。こちらの本のターゲットは小学校の中学生以降だと思えます。

私たちが汐文社は環境、人権、福祉など社会的なテーマをずっと追いかけてきました。子どもの本向けの出版社の多くは小規模ですが、反響を訴えるためにつくられた会社が多く、学校の先生や図書館とタッグを組みながら、「平和」を中心に大切な社会理念を子どもたちに伝えていきました。

SDGs は国連での採択後、政府を經由して国内の人々にその理念がもたらされた。子どもの本に関わる私たちには、政府にとって耳が痛いであろうことも言ってきましたし、そういう本も作ってきました。とはいえ、SDGs の理念は正しいものだし、継続する世界を形成するためのメッセージを子

写真と文字だけで理解できる分かりやすい本を目指しました。原さんが、今の日本が置かれている状況を最新のデータとともに細かく書いてくださったっていいですね。信頼性があるって、全3巻で他に何もいらないというくらいシリーズになっ

ています。

――コロナ禍でリアルイベントが難しい状況ですが、この『SDGs はじめのいっほ』を使ってオンラインイベントを開かれたそうですね。

門脇大さんが編集した書籍の一部

